

1 横浜市小学校社会科研究会 基本方針

横浜市小学校社会科研究会（以下、浜小社研・市社研とする）は、社会科教育の発展をめざす会員の主体的な研究活動によって成り立つ組織として、次の方針を設定しました。

（１）研究活動

会員の主体的な研究活動を通して、望ましい社会科教育のあり方を明らかにし、その確立を図ります。

- ① 会員は、研究活動を通して、社会科についての見識や力量を高め、それが各学校の社会科教育の充実につながるようにします。
- ② 研究成果や社会科教育についての情報を会員はもとより広く全市に提供し、全市的な社会科教育の充実に努めます。
- ③ 実践に基づいた研究を通して、学習内容・学習方法の理論的研究に努めます。
- ④ 児童の発達段階を考慮し、指導内容に即して、基本的人権を尊重する態度の育成に努めます。

（２）会の運営

会の運営にあたっては、年間計画に基づき、主体的な研究が進められるようにします。

- ① 社会科教育の研究を志す教師が、進んで参加できるように工夫します。
- ② 本部（横浜市小学校社会科研究会）と支部（各区小学校社会科研究会）は連携をとりながら、それぞれの特色を生かした研究活動を進めます。
- ③ 研究活動の自主性を維持し、広く先輩、教育委員会、研究者等の指導・助言や情報提供等を得て、研究の深化を図ります。
- ④ 本市の社会科教育発展のため、会員の層を広げ、組織と内容の充実・拡大を図るとともに、神奈川県小学校教育研究会社会科研究部会・関東地区小学校社会科研究協議会・全国小学校社会科研究協議会の活動との連携を図ります。
- ⑤ 過去４回開催された、全国小学校社会科研究協議会研究大会・神奈川大会の成果と課題を受け、令和１０年度・令和１７年度の全小社神奈川大会の開催に向け、さらに研究を深めて充実させていきます。

2 研究主題

子どもたちを取り巻く社会が大きく、加速度的に変化する中、様々な変化を柔軟に受け止め、人の営みに学びつつ、感性を駆使し、将来のあり方を主体的に選択・判断する力を培うことが重要となっています。

自ら社会とかかわり、他者と協働しながら生きていく子どもを育てていくためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図っていくことが大切です。

そのためには、具体的な人の営みに学び、その中で、未来を創っていくことのできる資質・能力を育てていく必要があります。そこで、今年度の研究主題を以下のように設定します。

人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育

「人の営みに学ぶ」とは・・・

「人の営みに学ぶ」とは、教材として取り上げる人の具体的な仕事や取り組みを学ぶことを通して、その人の考え方や生き方から、自分の考え方や生き方を問い直したり、見つめ直したりすることです。また、その人を通して見えてくる、社会や産業、歴史等の関係性や仕組みなどの概念を形成していくことです。

それぞれの目的意識をもって、様々な問題に取り組みながら仕事などに従事する人の業や知恵、工夫などにふれることで、本物と出合う実感的な学びが深まっていきます。また、本物であるからこそ、そこに切実感がうまれ、社会的事象に対し本気になって、様々な立場から多角的に考えることのできる学びに繋がっていくと考えられます。多くの人々が今までにない困難に立ち向かう現代において、それらを乗り越えていこうとする人々の姿にふれることで、子どもたちもまた、自分ごととしてとらえ、自分たちの未来を切り開いていく力を身に付けていくことができると考えます。

「未来を創る」とは・・・

「未来を創る」とは、よりよい社会の創造に向けての主体性や人間性、価値観の多様化や少子高齢化等の社会問題に向けて進んで社会とかかわり、持続可能な社会の実現を目指すことです。そのためには、今日的な課題と向き合い、主体的にかかわり、異なる他者との対話を通して、互いの生き方や考え方を尊重しながら、協働的に解決していく力が必要です。

人の営みにふれ、問題解決的な学びを進める中で、子どもたちは、社会に関心をもち、自分はこうしていきたいという思いや願いをもつと考えられます。その中で学んだことを自分ごととして還元し、身近なところでの社会的な問題や改善点に気付き行動しようとする姿を目指していくことが重要となります。社会科教育の原点である「平和で民主的な社会」を目指す子どもを育てていくために、学習の中で、みんなが幸せになるためにはどうしたらよいか子どもに問いかけていくことが大切です。

産業界など、様々な働く人々が抱える課題に目を向けながらも、未来に「不安」ではなく、「期待」をもつことのできるような学びを創っていくことが、「未来を創る」子どもを育てていくことにつながると考えられます。

【研究主題設定の背景と社会科教育の課題】

加速する社会の変化と求められる力

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を機に、GIGAスクール構想が劇的に進み、学校教育を支える基盤的なツールとして、ICTが当たり前のように使われるようになりました。手元のタブレット端末を開けば、多種多様な情報が手に入り、友達の意見もコミュニケーションツールによって瞬時に見られるようになる中で、自ら社会的事象とかかわり、解決すべき課題を見だし、主体的に考え、必要な情報を取捨選択しながら、多様な立場の人と協働的に議論していくことなどがより重要になってきているといえます。

また、人との直接的なかかわりが希薄になりがちな時代だからこそ、子ども自らが「ひと・もの・こと」などの社会的事象と主体的にかかわり、人の営み（社会や文化）を通して社会的事象の意味を理解していくことが大切であり、社会的事象の意味や価値を考え、選択・判断し、よりよい社会をつくっていかうとする子どもを育てる社会科教育の役割は一層重要になってくると考えます。それは、社会の変化に対応するという受動的な姿勢ではなく、変化を前向きに受け止め、人の営みに学びつつ、感性を駆使し、将来のあり方を選択・判断する力を培うことであると考えます。

指導要領で示された資質・能力と令和の日本型学校教育

令和3年の中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」に示されているように、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められています。

また、令和5年の中教審では、「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の相互循環的な実現に向けた取組についての方針が出されました。一人ひとりが自分のよさや可能性を認識するとともに、多様な人々と協働しながら様々な社会的变化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、「持続可能な社会の創り手」になることを目指すという考え方が重要です。将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていくことが求められています。また、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じて日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図っていくことが求められます。

子どもたちが、学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要です。その取組において求められているのが「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善です。

授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが大切だと考えます。

社会の現状を見ていると、社会問題や政治に関して、自分とのかかわりで考えられなかったり、無関心だったりする姿も多く見られます。これからの世の中をそれぞれの人が幸せを求めて生きられる世の中にしていくためには、一人ひとりが社会の一員だと自覚することが出発点です。その上で、社会を創っているのは自分だという認識をもち、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、社会へのかかわり方を選択・判断し、自ら社会に参画していくことが望まれます。そうした国民を育てていくために、社会科教育は今後も大きな役割を担っていくと考えられます。

【横浜市小学校社会科研究会が目指す社会科教育】

神奈川が積み上げてきた教育

これまで、過去4回の全小社神奈川大会（以下、全小社）が開かれました。昭和56年度には「社会における自らのあり方を確かなものにしようとする子どもの育成を目指した社会科教育」、平成7年度には「共に生きる社会を目指し、自らのあり方を問い続ける社会科教育」を研究主題に設定し研究を進めてきました。当時の時代背景を踏まえながら、どちらの大会でも社会科について「人間相互のつながり」や「人間の働きの素晴らしさに目を向け」「人間の心の温かさを感じながら」といったことが研究の視点に入れられ、人々の営みを学習対象とする社会科の本質と、現代につながる課題を意識した研究が進められてきました。そして、平成21年度はこれまでの研究を深化させ「社会とのかかわりを実感し、自らの生き方を問い続ける社会科教育」を主題として神奈川の考える社会科教育を全国に発信することができました。目指す子ども像の一つに示された「人のつながりを大切にし、社会の一員としての自覚をもつ子ども」は、現代で大切にしなければならない「よりよい社会の創り手」となるために必要な資質であり、神奈川の取り組んできた社会科は、まさに「人」を中心に据えてつくられてきたと考えることもできます。令和2年度は、これまでの成果を踏まえ、「人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育」という主題を置き、これからの社会を生きる神奈川の子どもたちが「身に付ける資質・能力」を明確にして、副主題を「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」としました。日常の生活や社会とのかかわりの中で学んだことをどのように生かしていくかということが、よりよい未来を創造していく子どもの育成につながるという神奈川の考える社会科教育を全国に発信することができました。

このように、私たちは一貫して、共に生きる社会の創造を目指して、変化する社会のなかで人間相互のつながりを強め、人権を尊重するとともに、自らのあり方、さらには生き方を問い続ける教育を重視してきました。

個の学びを大切にできた浜小社研

これまで浜小社研では、「授業記録をおこす」「座席表」「注目児童」などの研究のアプローチにも表れているように、「個」を大切にしながら学習を構成してきました。個々のものの見方や考え方は個性的であるという立場に立ち、個の変容や個の問いを大切にしてきたという点は、浜小社研の社会科の大きな特徴だといえます。社会的事象に対して子どもが見いだした問いから学習問題が「子どもの言葉」でつくられ、その解決に向けて調べたり考えたりして追究する学習過程は、子どもを意欲的、主体的にし、それまでの学びや生活経験などを生かして思考する機会をつくってきました。その中で、子どもたちは社会的事象に対する個々の見方や考え方を深めたり広げたりすることができ、そうした学習を創りあげてきたことも、浜小社研の特徴です。「一人ひとりの個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すこと」は、浜小社研が取り組んできた「子どもが社会的事象に主体的にかかわる」「子どもが自分の言葉で語る」授業の構築と重なる部分が大いと考えます。こうした実践を今後も大切にしていきます。

一方で、浜小社研で課題としてとらえた以下の点に関して、令和2年度の全小社神奈川大会で改善を図ってきました。

- 個々の見方や考え方や個の理解など、個に即した学習に重点が置かれすぎて、社会科の内容やねらいから離れた学習過程になってしまうこともあった。
- 「自らのあり方」「自らの生き方」が強調されてきたため、学びの評価が、個の変容に偏ってしまい、社会科としてどのような資質・能力が身に付いたのか、評価できていないこともあった。

浜小社研で
大切にしてい
きたいこと

これまで大切にしてきた、「子どもが社会的事象に主体的にかかわること」や、「自分の言葉で語る授業の構築」といった、個を大切にした実践とともに、令和2年度の全小社神奈川大会で構築した「学習過程」に主軸を置いた研究を引き継ぎながら、以下のような点を大切にしていきたいと思います。

社会科教育の質的向上を図るため、この現状を見つめるところから課題を探ると、次のようなことが言えます。

まず、浜小社研では、「様々な問題に対して、自らのあり方を決定し、対応する力を培っていく」こと、また、「人間相互のつながりがもつ意味の大切さを知り、人間関係をよりよいものにするための自らのあり方を問い直す」こと、「社会生活において、自ら考え、判断する力を基に基本的人権を尊重する態度について自らのあり方を問い直す」ことなど、「自らのあり方」を培うことを重視してきました。さらに、価値観の多様化の中で、自分らしさの確立を目指す一方、「自らの価値観だけで判断せず共に生きる社会の一員として互いに認め尊重する態度の育成」を目指してきました。

その中で、子どもたち自身が学習に対して見通しをもって学習を進めるとともに、主体的に学びを進め、学んだことを社会や生活に生かす学習過程が大切であると考えました。このような学習過程を考える中で、「単元を見通す学習問題」と「本気の学習問題」を設定し、それぞれの学習問題についての吟味を行ってきました。

また、子ども一人ひとりを具体的にみつめ、子どもたちにとってより切実感のある学習になるよう授業改善を図り、問題解決的な学習を柱として取り組んできました。同時に、様々な教材開発を行うとともに、授業研究や授業実践についての研究交流を進めるなど、研究の充実を図ってきました。その結果、問題解決的な学習を柱とした授業改善が着実に進められ、子どもが主体的に学習に取り組む姿勢がみられるようになってきました。そして、令和2年度の全小社神奈川大会を通して、何をどのように学ぶかといった学習の見通しをもつことや、学んだことを振り返り、そこから考えたり身に付けたりしたことを社会や生活に生かしていくような学習過程のあり方について研究を深めてきました。一方で、子どもたちが見通しをもって学習に向かうように学習計画を立てる過程で、子どもたちの学習の道筋が教師の主導のものになりやすいことや、単元の中で本気の学習問題をどこに位置付けるかなど、検討が必要な部分も見えてきました。

子どもが見通しをもって、教師と共に学びを創ることや、子どもが本気になって学ぶ中で、身に付けさせたい目標に向かえるようにしていくためには、教師が子どもたちに身に付けさせたい内容や力を明確にし、教材をじっくり分析して単元をデザインしていくことが必要です。教師が子どもたちをみとり、単元のイメージをもつことで、学びの主導権を適切に子どもたちに委ね、子どもたちが自らの学びを「自分ごと」として捉え、自発的に他者とかわりながら学びを深めていく学習活動を展開していくことができるのではないかと考えます。

令和6年度より、特別委員会として「学びの充実部会」を立ち上げ、ICTを活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実についての研究を進めています。

学校におけるさらなる働き方改革が求められる中、問題解決的な学習の充実をより多くの先生方に広げていくため、何をどのように学ぶかを明確にし、子どもと教師が共に学びを創ることの楽しさを感じられるような社会科教育を創っていくことを大切にしていきたいと考えています。

浜小社研の
考える「育
みたい資
質・能力」

【浜小社研が育みたい資質・能力】

令和2年度に行われた全小社では、社会科の学習を通して、将来にわたりどのような力が身に付くのか、神奈川の子どもたちに「育みたい資質・能力」を設定しました。現在や予測不可能な未来において、目指すべき生き方は多様かつ個別であり、一言で表現することはかえって誤解を生じます。むしろ個々に合った生き方を形成していく上で必要な「育みたい資質・能力」を具体的な目標にしていくことが大切であると考えます。

これを受けて、浜小社研では、これまで述べてきた研究主題設定の背景、社会科教育の課題、浜小社研の研究の成果と課題から、育みたい資質・能力を次のように設定し、今後も検証、明確化を図ります。

- 社会的事象（ひと・もの・こと）に主体的にかかわり、自ら問いを見つけ、人の営みを理解していく力
- 社会的な見方・考え方を働かせて、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に考え、感性を駆使して選択・判断する力
- 共に生きるよりよい未来を創造するために、学んだことを社会や生活に生かし、これからのあり方を問い続ける力

浜小社研では、3つの力を以下のように考えました。

○社会的事象（ひと・もの・こと）に主体的にかかわり、自らの問いを見つけ、人の営みを理解していく力

現在のように経験値だけでは予測しにくい社会において、子ども自身がその様々な変化に積極的に向き合い、興味関心を深めて、自ら社会に対して問いかけないと、課題を見つけることや社会とかかわることが十分にできないまま、生きていくことになりかねません。社会の主体的な形成者として育つためにも、様々な変化や情報を見極めてよりよく生きていくためにも、どのような問題解決をしていけばよいのかを考え、人の営み（社会や文化）を通して社会的事象の意味や価値を理解する力を身に付けていくことが大切です。

- ・社会的事象に対して興味・関心をもち、自ら問いをもつ
- ・問いに対して、予想や学習計画を立て、問題解決の見通しをもつ

○社会的な見方・考え方を働かせて、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に考え、感性を駆使して、選択・判断する力

学習指導要領で、『社会的な見方・考え方』は社会的事象を見たり考えたりする際の視点や方法」と定義されました。言い換えれば、学びを深めていくための視点や方法が「社会的な見方・考え方」ということです。特に社会科では、時間、空間、人間相互の関係などの視点に着目して社会的事象を捉え知識を構築していくことが求められています。つまり、社会的事象のもつ意味や価値を多角的に捉えるために子どもの時間、空間、人間相互の関係などの「社会的な見方・考え方」を育成していくことが大切だと言えます。

さらに、浜小社研では、人に寄り添うために想像力や感性を働かせることも大切にしてきました。人は社会の中で生活を営み、個々の生き方をつくりあげていく上で、様々な選択や判断を行っています。その選択や判断に至った考えや生き方に迫るために、浜小社研では、様々な資料を基に実践してきました。今後も想像力や感性を駆使しながら、人の営みに迫る学習過程を大切にしていきます。

- ・社会的な見方・考え方を働かせ、多面的に学習問題を追究・解決する
- ・社会的事象の意味や価値を、人と出会い、人の営みを通して、感性を働かせながら考える

○ともに生きるよりよい未来を創造するために、学んだことを社会や生活に生かし、これからのあり方を問いつける力

浜小社研では「ともに生きる社会を目指し、自らのあり方や生き方を問いつける子どもの育成」に力を注いできました。これは、変化の激しい社会の中で自らのあり方や生き方を確立するために、必要な能力や知識を自らの主体的な行動や意志で学びとることを目標に取り組んできた横浜の社会科のあり様を示しているものです。

- ・獲得した概念などに関する知識や技能を、これからの生き方に生かしていこうとする
- ・社会に見られる課題に関心をもって、自らの社会へのかかわり方を問いつける

上記を踏まえ、冒頭に述べた「人の営みに学び、未来を創る子どもが育つ社会科教育」という研究主題のもと、浜小社研は、今年度も子どもたちのために、研究を深めていきます。